

(ミイとトラの大冒険) 日本の農業と伝統文化

解説資料

I 農業の営みについて

わが国の江戸時代には、全国に約7万の村落が存在し、人口の約80%が村落に住む百姓でした。農村では、土地を拓き、村を創り出した地域の先人などが鎮守の杜に祀られ、長い歴史をもつ農業の営みを通じて、五穀豊穡を祈る芸能や祭り、農業上の技術、地域独自の知恵などの文化が守られ、伝えられています。

日本の年中行事や祭りの多くは、稲の豊作を祈る・感謝するなど農耕の祭事に由来しています。これらは、都会では失われつつありますが、農村では、農業活動を通じて、それぞれの地域で、「春、夏、秋、冬」の季節に応じた様々な伝統的な行事として受け継がれており、人々は農耕儀礼と密接に結びついた年中行事を通じて季節を楽しみ、様々な願いを託し、村落の絆を強めてきました。

四季ごとの日本の代表的なお祭り

春

春は田植えの季節です。

「田の神」を山から迎え入れ、今年の豊作を祈る祭りが行われます。

● 水口祭（みなくちさい）

苗代に粃を播く日に水口に土を盛り、季節の花や小枝を挿し、御神酒や焼米などを供え、山の神に豊作を祈ります。

● 御田植祭

田植えの時期に早乙女などが実際に田んぼに入って田植えなどの農作業を行い今年の農作業の無事や豊作を祈願します。

夏

夏は稲が成長する季節です。

無事に育つように、害虫の発生、雨や風の被害がないことを祈ります。

● 虫送り

松明（たいまつ）を灯し、害虫を結びつけたわら人形を流す、捨てるなどして、害虫を追い払います。

● 雨乞い

干ばつが続いた際に、踊りを奉納したり火を焚くなどして、雨が降ることを祈ります。

秋

秋は実り、収穫の季節です。今年も無事に収穫できたことを神に感謝し、各地の農村では秋祭りが行われます。

● 新嘗祭（にいなめさい）

新穀を神々に供え、その年の収穫に感謝する宮中祭祀の一つです。十一月に各地の神社でも収穫祭として行われます。

● 秋祭り

収穫に感謝して秋に開催される祭りの総称です。農村では田の神に感謝し、山へと送り出す祭りも行われます。

冬

冬は農閑期となります。寒さの厳しいこの時期には、魂を充実させ、新たな年の無病息災、五穀豊穡を祈ります。

● 左義長（さぎちょう）・どんど焼き

小正月に各地で行われる火祭りです。正月飾りなどを燃やし、その火で焼いた餅などを食べて、新たな年の無病息災や五穀豊穡を祈願します。

● 田遊び

春の耕作開始に先立ち、新春にその年の豊作を祈って行う予祝行事です。神社の拝殿などで田植えなどの農作業の様子を模倣的に演じます。

▼詳細はこちら

「農村の伝統文化」農林水産省HP

https://www.maff.go.jp/j/nousin/nouka/n/hougyo_kinou/pdf/maturi_zentai.pdf

(8MBダウンロード)



Ⅱ 人々の絆をつくってきた農業

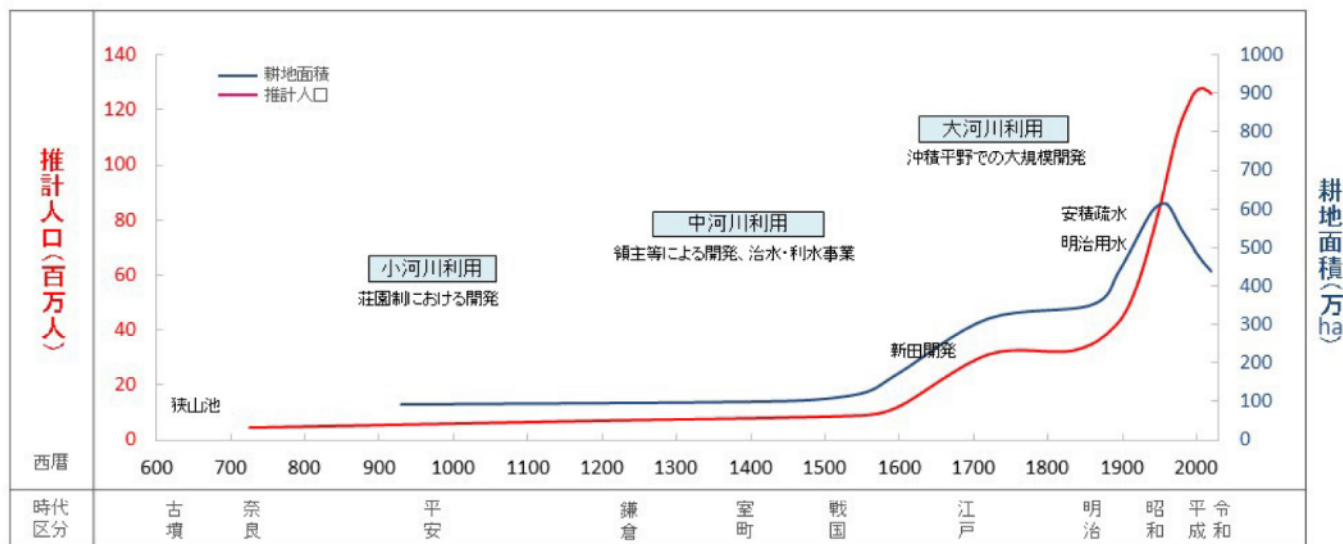
1 食料の生産を支えてきたかんがい施設

日本では、2千年以上の永きにわたり稲作を行ってきました。そのためには農業用水を人の手で引く「かんがい」を行うことが必要であり、長い間、人間の生存にとって不可欠な食料生産の基盤である農地を整備してきました【図1】。

稲作が伝来した当初は天水や湧水、小河川等の大きな土木工事を行わなくても水利用できる地域で水田農業が行われ、奈良時代頃には、大陸から伝わった技術により、各地で農業用ため池が築造されました。江戸時代になると、東京湾に注いでいた利根川を人の手で太平洋に付け替える大工事（利根川東遷）によって大河川の氾濫原であった関東平野が開発可能になったことなどにより、江戸時代前半の1000年間で耕地面積が倍増（約150万ha↓約300万ha）し、それに支えられてわが国の人口が増加することとなりました。明治時代以降になると、近代的技术（セメント、ダイナマイト、蒸気ポンプなど）が導入され、奥羽山脈を突き抜く安積疏水（あさかそすい）などの国家的なプロジェクト【図2】が実施され、富国政策の下で耕地面積と人口が再度急増しました。戦後になると、日本第2位の湖沼面積だった八郎潟（秋田県）を陸地化して1万7千ha（山手線の内側の約2・7倍）の干拓地とともに大潟村を丸ごと生み出した八郎潟干拓【写真1】など、国土を改変する大規模プロジェクトが実施され、戦後復興期の食糧増産を支えました。このように、わが国では技術の発展に応じてかんがい施設などの農業生産基盤が整備され、わが国の命が支えられてきました。

▼詳細はこちら「水土の礎 礎の歴史的展開」

<https://suido-ishizue.jp/tenkai/index.html>



【図1】 人口と耕地面積の推移（資料：農林水産省）



【図2】 安積疎水全図
（安積疏水土地改良区提供）



【写真1】 八郎潟干拓地の航空写真
（左：着工前（S32）、右：干拓後（S44））
（農林水産省のHPより）

人々の絆を強め、社会秩序を支えてきた かんがい施設

中世以降になると、農民たちは自衛のために集落単位の自治組織を作るようになり、これが日本特有の村社会の原型となりました。

農民たちは寄合で掟を定め、用水管理や祭りの運営などで結びつき、不当な扱いには一揆で対抗するなどにより、連帯意識を強めていきます。村々にとって水を得ることは死活問題であり、渇水時には、強い連帯意識で結ばれた自治組織の間で水争いが頻発しました。岩手県の滝名川では記録に残るだけでも36回の水争いがあり、死者が出るような生々しい情景も記録されており、耳や口が欠け落ちた門前狐【写真2】が当時の水争いの激しさを物語っています。

農民たちは水争いの度に分水方法を調整し、古田優先、上流優先、上下流平等といった水利秩序が各地で形成されました。渇水時に

▼詳細はこちら「瑞穂の国の水土里の軌跡 里の章」

<https://www.aric.or.jp/kiseki/jp/sato/index.html>

は、用水時間を区切って平等に水を分け合う「番水」が行われ、特に雨が少ない讃岐地方（香川県）では線香が燃える時間でため池の水を配分しました【写真3】。滋賀県の高時川では、渇水時になると下流の農民たちが白装束をまとって隊列を組んで行進し、上流側の農民たちと対峙して厳かに口上を述べて許可を得た上で上流の堰を切り落とすという「井落とし」【写真4】という約束事で練り上げられた儀礼が昭和18年まで約400年間にわたり実施されました。このように、各集落は流血沙汰の歴史を踏まえて尊重し合いながら、協働して社会秩序を順守してきました。

このようにして、わが国の人々は限りある国土の中で、「和」を維持するための行動様式を身に付けてきました。



写真2 志和稲荷神社の門前狐（撮影：農林水産省）



写真3 番水に使われた拍子木・線香箱・太鼓

写真提供：香川県農政水産部土地改良課



写真4 (左) 井落とし前に口上を述べる集落の代表者たち

(右) 井落としの状況



写真引用：水土の礎 湖北の祈りと農 https://suido-ishizue.jp/nihon/19_kohoku/04sp.html

現代に受け継がれる農業水利施設を管理する 「土地改良区」

現代に受け継がれるダム、取水堰等の基幹的かんがい施設等は約7千7百箇所整備されています。また、水路については基幹的な施設が約5万km、末端の小水路まで含めると約40万km以上となり、地球と月の距離（約38・4万km）を超える総延長となっています。これらの施設は先人たちの知恵と熱意により築かれ、時には激しい水争いを伴いながら、農業者が中心となって共同作業により守り育まれてきたものです。

他方、これらの施設の多くは戦後復興期に整備・改修されたものであり、今後、耐用年数を超えた老朽化施設が増加していく見込みである

ことから、これらの施設を良好な状態で保全管理して、次世代に引き継いでいく必要があります。これらの農業水利施設を管理しているのが「土地改良区」という団体で、土地改良法に基づき、地域の関係農業者により組織されています。

土地改良区の数是全国に約4千3百地区、組合員数は約346万人（令和3年現在）となっており、土地改良区は農業水利施設の整備、区画整理等の土地改良事業を実施するほか、整備した施設の維持管理等を行うなど、国民の命とくらしを幅広く豊かな農業と農村を下支えする活動を行っています。



図3 土地改良区が行う管理・操作業務の例

世界から評価を受けている日本のかんがい施設遺産

世界かんがい施設遺産 (Heritage Irrigation Structures) 制度は、かんがいの歴史・発展を明らかにし、理解醸成と施設の適切な保全に資することを目的として、国際かんがい排水委員会 (ICID: International Commission on Irrigation and Drainage) により創設された制度です。

世界かんがい施設遺産は世界で17か国142施設登録されており、そのうち日本の施設数は47と、世界で最も多く登録されています(令和4年10月末時点)。登録される施設は、建設から100年以上経過し、歴史的・技術的価値のあるかんがい施設であり、日本のかんがい施設の歴史的・技術的価値が国際機関からも高く評価されているといえます。

世界かんがい施設遺産への登録により、かんがい施設の持続的な活用・保全方法の蓄積、研究者・一般市民への研究機会の提供、かんがい施設の維持管理に関する意識向上に寄与するとともに、かんがい施設を核とした地域づくりへの活用が期待されています。

▼世界かんがい施設遺産への最新の登録情報はこちら

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kaigai/ICID/his/his.html>

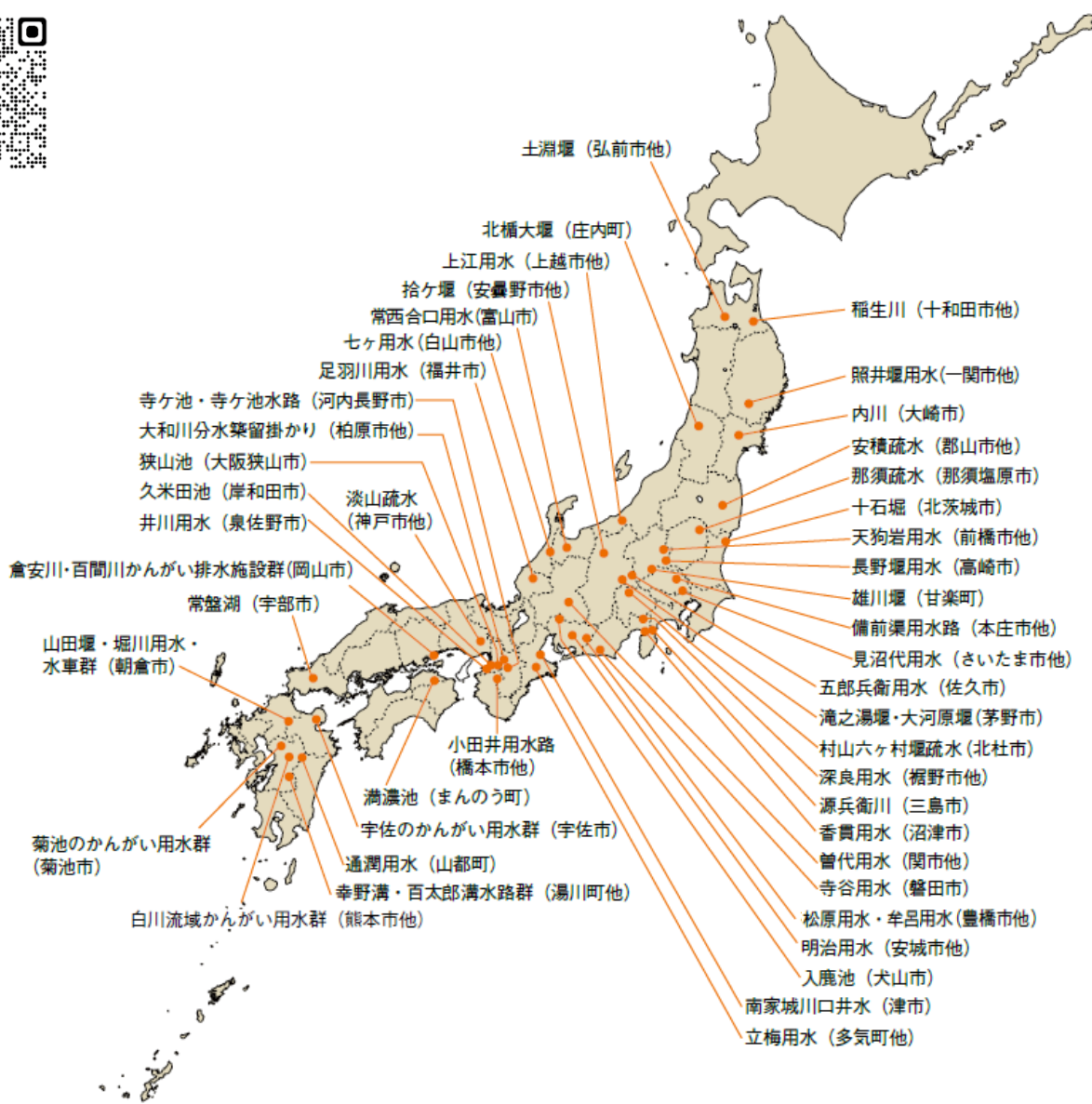


図4 世界かんがい施設遺産の位置図
(令和4年10月末現在)